
天に叫びしは誰ぞ

Jiiek.Hammer

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天に叫びしは誰ぞ

【Nコード】

N1646C

【作者名】

Jiiek・Hammer

【あらすじ】

ブツポウソウの鳴く夜に現れた巨人の正体は？彼の出現と時を同じくして地球全土を襲う未曾有の災厄。果たして人類に未来はあるのか？

ブツポウソウの夜・プロローグ

ブツポウソウの夜 プロローグ

夜の鳥が鳴いている。

ブツポウソウ、と、鳴いているのだと“じーじ”は言ったが、千春には「ボー、ボツ、ボー」としか、聴こえない。

この時期、夜になると毎晩のように山に響く声であった。その鳴き声に惹かれ、千春は今、本堂の裏手に出ていた。

山寺である。

盆地に広がる小都市の北西に聳える山地、その、奥深い山々につながる杣道を辿るうちに、苔むした石段が右手に現れる。

登りきれば、泉水寺であった。

千春は泉水寺住職の娘である。先月の誕生日で満4歳になった。体が小さく、幼く見えるが、利発な瞳の愛らしい少女であった。

さて、千春はこの夜、祖父を亡くしたのである。

生まれて間なしに母親を亡くしてはいるが、なにぶん、物心がつかまえることでもあって、死を間近に見るのは今回が初めてであった。

「じーじ」が目を覚まさないのが、千春には理解できなかった。死んだ人は、いつ起きるのかとしつこく問うて、父親を困らせた。

二度と目を覚まさないということ、この子なりに理解した時、初めて泣いた。

優しい祖父であった。

父親は大好きだ。

大好きではあるが、厳格な父よりも、暖かな日溜まりのような祖父の方に、より、親しみを覚える千春であった。

祖父としても、いかつい息子しか持てなかった身としては、愛らしい孫娘を溺愛したとしても仕方あるまい。

日がな一日、「じーじ」と遊んで飽きない子であった。

千春はいわゆる、「ジイちゃんっこ」であった。

日頃、滅多に泣かない少女である。

その娘が、しゃくりあげながら、ホロホロと涙を流し続けた。

その悲しみを想い、だれしも、口をつぐむほかはなかった。

ブツポウソウのことを教えてくれたのは、祖父であった。

一年ほど前の夜中に、起き出して泣いている千春を膝に抱いてあやしながら、優しく説いてくれたのだ。

ブツポウソウには、「姿のブツポウソウ」と、「声のブツポウソウ」とがいるらしい。

今、闇の中で鳴いているのは、もちろん、「声のブツポウソウ」である。

同じ「ブツポウソウ」なのに、何故、「姿」と、「声」とがあるのか。

千春には理解できなかった。

「声」のブツポウソウの本当の名が「コノハヅク」である、と聞いた時、千春はさらに頭を悩ました。

一年経った今でもよく分からない。

ただ、何度も同じことを聞く千春に、辛抱強く、穏やかに、話をする祖父の膝の上で、いつの間にか寝入っていたのを思い出す。

その、優しい“じーじ”はもういないのだ。

千春の幼い胸は悲しみに痛んだ。

その千春が、ふと深夜に目を覚ました時、ブツポウソウの声を聞いたのである。

一年前の夜を思い出し、ブツポウソウを見たくなくなってしまった。

夜中に鳴く鳥である。

千春はまだ、ブツポウソウを見たことはない。その姿を見れば、「じーじ」と、またあえるような気がした。

寢所をそっと抜け出し、裏口から本堂の裏手に回る。満月の蒼い

光に染まった石庭が、昼間とは違う姿を見せていた。

海を表す砂の波と、島を模した岩が、月の光にさらされて、本当の海のようにだと、千春は思った。

その時、本堂からの読経の声に気付いた。父であった。

今日は日が悪いからと、通夜を明日の夜にきめて弔問客を帰した父が、千春を寝かし付けた後本堂に籠ったらしい。読経の声は日頃の父に似合わず、湿っていた。

ちちが泣いてるー

祖父が亡くなった時には涙を見せなかった父が、今、泣いている。泣きながら経を読んでいるのだと、千春は思った。

豪放磊落で口の悪い千春の父親と、穏やかで無口な祖父。

正反対の二人だったが、深いところで分かりあっていたのではないか。

お勤めも、用事も無い時には、二人で何を話すでもなく縁側に並ぶ姿を時折、見た。

なぜかその姿が羨ましくて、間に割って入っては邪魔をするのが千春の常であった。その度に困ったような、うれしいような笑顔を見せる父と祖父が大好きだった。

その祖父がもういない。

千春は、こぼれ出た涙を拭くと、父の読経を背にして歩き始めた。庭の奥に小さな池がある。その池を回れば、裏の森に通じる小道があった。

そこは、千春がよく祖父に連れられて散歩した道である。

山の森とはいえ、手入れも行き届いているし、出てくる獣といえはこの春から住み着いた狸の家族ぐらいのものである。危ない森とはいえない。

ブッポウソウの声はそこから千春を呼んでいた。

ブツポウソウの声に励まされ、20メートルほども進んだであろうか。

満月が雲にさえぎられたのか、辺りが突然の闇に包まれた。明かりもない山の中である。

鼻をつままれても分からぬような闇の中、千春の足は止まってしまった。

ブツポウソウまで鳴き止んでいた。

とたんに、一人で出てきた事を後悔する。

心細さでお腹が痛いような気になんてなってきた。

千春は、来た道を振り返り本堂の明かりを確認すると、そちらに走り出そうとした。

その時である。左手の闇の中森の奥から、かすかな音が聞こえるのに気付いた。次第に近付いてくる。

複数の小動物が下ばえをかき分ける音のようであった。

たぬきさん？

狸の一家なら顔見知りである。食べ物を手ずから与えた事もあるのだ。特に、三匹の子狸は千春を恐れず、良く馴れていた。

よく見ようとした千春は、しゃがみ込み目を凝らした。

月を覆った厚い雲が途切れようとしていた。

月の光に蠢く影が見えた。

どうやら狸ではない。動き方が狸のそれとは違っていた。

それどころか、千春の知るどんな動物たちの動きとも違っていた。

幼い千春が見た事のある動物の数はたかが知れてはいるが、動く法則性がどれとも違う。

いや、見た事はある。だが、現実にはない。

千春は思い出していた。

夢なのだ。さつき、冷たい汗にまみれて飛び起きた夢の中で、なのだ。

起きた途端に忘れていたのだが、その夢の中で見たのだ。身を震わせる悪夢の中、闇から姿を現したのは・・・

千春は本堂に向かって走り出した。

小さな手を一所懸命振り回し、ちいさな足を必死に回転させた。途端に、転んだ。

手を付く事もならず、その可愛い鼻を擦りむいてしまう。涙をこらえながら、立ち上がる。

反射的に振り向いた千春の目に映ったのは、森から小道に這い出てくる夢魔の姿であった。

何匹いるかも分からない。

ひとかたまりになっていた生き物が、さわさわと音をたてて分かれてゆく。

「ひっ」

千春の口からしゃっくりのような声が漏れてしまった。

生き物たちの眼がこちらを向いたのが、闇の中でも分かった。

気付かれた

千春は、もう後も見ずに走る。走る。

小さな手足を遮二無二振り回して走った。

本堂に行けば父がいる。強く、大きい父がいる。

しかし、所詮は4歳児の足であった。八力がゆかない。

本堂の明かりは、いつまでたっても大きくならない。本堂の父に向かって助けを呼ぼうとした。

途端、また、転けた。

立ち上がるうとしたが、立てない。

右足首に痛みを感じた。

木の根にでも爪づいたのだろうか。

そろそると、足首を見た。動かせない。

足首に、黒いものが絡み付いている。

それが後ろに延びてゆき、やはり、黒い固まりにつながっている。

動いていた。

千春の足首を掴んだまま、それは徐々に近付いてくる。

その時、満月を隠していた厚い雲が、完全に吹き払われた。
見えた

それは、猿に似ていた。

全身を覆う黒い剛毛。

千春の右足首を握る、力強い手は、さぞや、枝渡りがうまいだろうと思わせる異様に長い腕に続いている。

腕に比べて短い足。

しかし、猿との類似はそこまでであった。

猿の体から延びる、太く、長い尾。

その身体ほども太く、体長の半分以上を占め、うねうねと、自分の意志を持っているかのように蠢く尾は、毛のかわりに、月光にてらと輝く鱗で覆われていた。

あたかも大蛇の下半身のごときであった。

猿と最も異なるのはその顔である。

前に突き出た長い口吻。

縦に割れた爬虫類の瞳。

ちよろちよると空間を探るように閃く二股の赤い舌。

全面を覆う銀色の鱗。

その面貌もまた、大蛇そのものであった。

まるで、猿の尻から潜り込んだ蛇が、内臓を喰らい尽くし喰い進み、仕舞いには顔突き破ったかのごとく見えた。

羊の皮をかぶったオオカミならぬ、猿の皮をかぶった蛇。

冗談にもならない。

まさに、悪夢の中の怪物であった。

その怪物が伸び上がり、首を伸ばし、鼻先を千春の顔に近付けた。
先が二つに割れた舌が、千春の顔をちろちろと舐めた。

生臭い息が呼吸を止めようとする。

逃げようにも体が竦み、動けない。

目の前の怪物の顔が上下に割れてゆくと、月明かりにも紅い口腔の内側が、鋭い牙を持った洞窟にも似て千春の視界を覆った。

千春は初めて、恐怖の叫びを叫んだ。
そして、夜が爆発した。

第1章 1

その日、異変が世界を覆った。

異様な小動物たちがどこからともなく現れ、他の動物たちを襲い始めた。

それは、妙な歪みをどこかに持つ生き物だった。

哺乳類のようでもあり、爬虫類のようでもあり、また、どれとも違っていた。

家畜は喰われ、人は襲われ、多大な被害を一瞬にして世界にまき散らした。

しかし、彼らは前触れにしか過ぎなかったのである。

異変がニュースに乗る前に、遙かに上回る災厄が地球全土を覆った。
破壊であった。

ビルが、家屋が、道路が、車が、列車が、船舶や、就航中の航空機にいたるまで、一瞬の轟音とともに消え去った。

基盤を突然失い、崩れ落ちる超高層ビル。

客室が消え去り、空中で四散する巨人機。

二つに折れて轟沈する豪華客船。

ダムが決壊して洪水をもたらし、発電所は燃え盛り、原子力発電所にいたっては、制御装置の消失により暴走し、チェルノブイリの悲劇を再現したもののさえあった。

最終戦争が起こったのだと思つたものは多かつた。

それにしても、破壊の様相が異様であつた。

砲弾やミサイルが飛んできた気配はなかつた。

爆発に伴う火災も皆無だつた。

突然、ある範囲の物質が消失する様に見えたのである。

そこに向かって、大量の空気が周りのものを巻き込んで殺到した。

これは決して、爆発ではない。

あえて言えば、『縮爆』であった。

あえて、ではあるが。

その縮爆が、ピンポイント爆撃のような正確さをもって重要施設を破壊し尽くしたのだ。

異変が始まって2時間足らずのうちに、全ライフラインの90%が齟齬をきたした。

行政機関や、警察組織、果ては軍に至るまで、組織的活動を果たせなくなっていた。

組織がその有機的結合を失った時、崩れ去る速度は想像を超えていた。

5時間と経たないうちに人類の20%が死に絶えていた。

そして、『縮爆』が散発的になり、世界が静寂に包まれた後、真の恐怖がその姿を現した……

夜は静まり返っていた

怪物は消えていた。

風に飛ばされそうになりながらしがみついていた樹の冷たい感触を頬に感じながら、千春は呆然としていた。

涙さえいつしか止まっていた。

森が消えていたのである。

ブツポウソウのいた森が消えていた。

目の前にあるのは、月の蒼い光に煌煌と照らされた巨大な窪地であった。

直径100メートルは下らないクレーターが出現していたのだ。

周りの木々は内側に向いて倒れ、無惨な姿をさらしていた。

何が起こったのか、千春には分からなかった。

突然の轟音とともに森が消失し、暴風が吹き荒れたのだ。飛ばされながらも、手近の樹にしがみついていたのは奇跡ともいえる。

気付いた時には森が消え、怪物も消えていた。

千春は震えた。

寒い。

気温が急激に下がっていた。

空気がキラキラ光っている。

空気中の水分が、あまりの低温に結晶化し舞っていた。

霧氷であった。

いくら山深い夜中とはいえ、6月も半ばになろうとしている。

異様な光景であった。

きれい。

千春は恐怖も寒さも忘れ、その幻想的な光景に見入っていた。

「千春！」

声が聞こえた。

父の声である。

轟音に驚いて、本堂から飛び出してきたのであろう。

千春の姿を認め、裸足のまま一散に小道を駆け上がってくる。

愛娘を抱き上げた。

その暖かみに安心したのか、初めて千春が嗚咽をあげた。

泣きじゃくる。

千春を抱きしめながら、父、玄道の視線は目の前のクレーターの中に、はた、と据えられていた。

クレーターの底、折れた木々の堆積の中から、何者かが現れようとしていた。

数百キロはあろうかという倒木を押し退けて立ちあがったのは、巨大な影であった。

玄道との距離は約70メートル。

ゆっくりと向かってくる。

近づくにつれ、異様さが際立った。素っ裸である。

巨大、の一言であった。

玄道自身、190センチの偉丈夫ではあったが、その玄道より頭ひとつ分は上背がある。

2メートル20センチはあった。

巨人と聞いていい。

しかも、その身長に見合う分だけの体重がありそうだ。

まるで、青銅の巨像が歩き出したかのような重量感があった。

玄道は、抱いていた千春を下ろして自分の後ろに隠した。千春は玄道の陰から、興味深そうに覗いている。

巨人は玄道の手前、5メートルほどのところで歩みをとめた。

巨人の容貌が月明かりに刻まれる。

肩まで伸びた漆黒の髪。

彫りの深い容貌。

意志的なごつい顎。

日本人ではない。

印象的なのは、猛禽にも似て月明かりに黄色く光る両の眼であった。人間の眼とも思えない、が、穏やかな眼の輝きであった。満腹した肉食獣の穏やかさであったかもしれないが。

巨人は、まず玄道を見、次いで、玄道の後ろの千春に視線を移した。

途端に相好を崩す。

ごつい顔に満面の笑みを浮かべた。

見る者を惹き付けずにはおかない、不思議な魅力を持った笑顔であった。

思わず、千春も笑みを返したほどであった。

その時、それが始まった。

―これはなんだ！

玄道は思わず叫びそうになっていた。

黄金の光を放つ真球が宙に生まれていた。

太陽の如く光り輝きながらも、眩しくはない。

暖かい、穏やかな球体であった。

確かにそこに存在しながら、そこにはない。

現実と二重写しになっていた。

いや、そうではないのかもしれない。

存在の、

認識の層が現実とは異なっているのだ。

そこにありながら、そこにはない。

玄道の認識能力では、とてもでないが説明しきれないものであった。

ただ、穏やかな、「友愛」とも言える波動をそこに感じたような気がした。

そこまで感じた時、雪崩をうって、もうひとつのビジョンが生じた。

壮大、いや、巨大なビジョンであった。

球体を基本とした、様々な幾何学的立体が幾重にも層を成し、ひとつの巨大なオブジェを形作っていた。

そこに、幾百、幾千とも知れぬ色彩が散りばめられ、これまでの人類の誰もが成し得なかった芸術作品とも思えた。

スケール的には一つの都市に匹敵するであろう。

それを正面から「視て」いるはずなのに、あらゆる方向からの視覚があった。

内側からの視覚までもが同時に存在したのである。

その途方もない情報量の渦に飲み込まれそうになった玄道は、目眩を覚えた。

それは突然消えた。

巨大なクレーターと、その背後に聳える山塊と、目の前に立つ巨

人とが、蒼い月の光に冴え冴えと浮かぶのみだ。

・・・何だ、今は！

玄道が口にしようにとした時に、深いバリトンが空気を震わせた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

巨人が不思議な響きの言葉を口にしていた。

若い頃に世界各国を旅した玄道にすら聞き覚えのない言語であった。

「こんばんわ」

そこで玄道は今度こそ本当に驚いてしまった。

事もあるうちに、千春がニコニコしながら挨拶を返したのだ。

千春は親から見ても神経質な子で、初対面の人間とは口も聞けないのが常なのだ。

父親の後ろに隠れて恥ずかしそうにしているのが、玄道としては、口惜しいやら腹立たしいやら、しかし、可愛くてたまらない一人娘なのである。

亡くなった母親に似たのだろう。

玄道に似てしまえばこれほど愛らしい娘になるわけもなし・・・

それはこの際どうでもいい事だった。

玄道は吠えた。

「こんばんわ、じゃねえ。

あんたいつたい何者だ。それに、今は何だ。

大体、この有り様は何なんでえ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

異国の言葉を話す巨人に、千春が天使の微笑みを返した。

2

地獄が現出していた。

都市部に現れた生物たちは、謎の縮爆によって荒廃しきつた文明を、人類もろとも喰らい尽くそうとしていた。

出現したもののたちの凶暴性と攻撃力は、それまでの動物たちのそれを遙かに上回るものだったのである。

彼らに一貫して共通したのは野方図とも言えるほどの多様性だけであつた。

これまでの進化の過程において捨て去られ、滅びたと思われていた形質が、それぞれ独自の道を歩み、「生き残り」と言つただ一点にのみ特化したかに見えた。

海には、イルカの優美な流線型のスタイルを先取りした、モササウルスの亜種としか思えない巨大な海棲爬虫類が回遊するマグロたちを食い散らし、深海では、全長30メートルを優に超す古代の肉食ザメ、メガロドン・カルカロドンが、マッコウクジラを追い回していた。

空には翼長5メートルの猛禽類が、やはり巨大な翼を持つ蛇としか思えない爬虫類の群と獲物を争つて壮絶な空中戦を繰り広げている。

森林では、獰猛な灰色熊が、突如大木をなぎ倒して現れた肉食性のナマケモノにそのテリトリーを追われていたし、草原では、失われたはずの巨大な猫たちが殺戮の宴を催していた。

猫科、犬科の肉食獣に混ざつて、3本の後脚で疾走し、4本の前足の巨大なかぎ爪で獲物を引き裂く、哺乳類とも、爬虫類とも、見ようによつては甲殻類とも思える、奇妙で、獰猛な肉食動物さえ散見した。

しかし、特記すべきは、小型から、超大型に至る、直立する肉食性爬虫類の一派の存在であつた。

恐竜である。

ブラキオザウルスに代表される、大型の草食恐竜の姿はなかったが、暴竜チラノサウルスの末裔たちが、多種多様に適応放散して、世界を悪夢に変貌させていた。

前肢の爪を異様なまでに巨大化させたもの。

後肢のスパイクを大型のナイフなみに鋭く発達させたもの。

寒冷地仕様なのか、羽毛を生やしたもの。

果ては、獣毛を身にまとい、哺乳類とも見紛うもの。

古生物学者が狂喜乱舞しそうな景色ではあったが、いかんせん、それを観察、分類すべき人物は、地球上に最早存在していないか、そんな暇がないかのどちらかであった。

人は自分のみを守るのに精一杯だったのだ。

災厄が始まって12時間も経たぬ内に全人口の80パーセント強を失った人類は、絶滅の危機に瀕していたのである。

その強大な文明を失った人類は、牙を持たぬ裸の猿に過ぎなかった。昨日までは万物の霊長を気取っていた愚かな猿たちは、目の前に屹立する滅びの壁に怯えながら、騒々しく騒ぎ立てるのみであった。
・
・
・

3

千春は、眠い眼をこすりながら父の膝の上に乗っていた。

目の前の畳の上には半分ほどになった一升瓶と飲みさしのコップが二つ並んでいる。

出入りの酒屋にもらったものであるコップには酒の名前が印刷されているのだが、

千春にはむろん、読めない。

千春と巨人二人が座するのは、いかにも殺風景ではあるが妙な熱気がこもった部屋であった。

本堂に続く母屋の隣に建てられた、いわば離れなのだが、寺の建物としては相応しくはないものだろう。

仏門の修行場などではない。

いわゆる、武道場なのである。

30畳ほどもある内部は四分の一が板場で、残りが畳敷きになっていた。

板の間にはベンチ台が置かれ、バーベルが架かっている。

その横には厚いゴムのシートが一畳ほどのスペースを占めていた。床にはダンベルやバーベルのウェイト等が無造作に置かれている。

何に使うのか、折り畳み椅子が一脚、壁に立て掛けられていた。

畳敷きの方に眼を移すと、一方の壁には剣架が設えられていた。そこには、木刀と、様々な長さの杖や、棒が架かっている。日本刀もふた振りあった。

その横のドアの奥のスペースは、更衣室兼、物置きになっており、掃除道具や種々の武器、何着もの道着などが納められていた。

ここに、件の一升瓶とグラスが隠してあったのを、玄道が引っ張り出してきたのである。

3人は、道場の畳の上に陣取っていた。

玄道は紺の作務依姿、千春はパジャマのままである。

巨人には、道場にあつた一番大きい道着の上下を着させたのだが、寸足らずだし、窮屈そうだ。

「くまさんみたい。」

巨大な熊が無理矢理服を着させられている姿を連想した千春は、クスツと小さく笑った。

日本酒を試していた巨人は、気に入ったのか、悠揚迫らぬ態でコップを口に運んでいる。

「どうだい。うめえだろう？　貰いもんなんだが、これがなかなか」

と、コップの酒を一息にあり、一升瓶を傾けながら玄道は破顔した。

「俺は坊主なんだが、こいつが三度の飯より好きでねえ。」

まあ、生臭坊主つてえやつだな」

その雄大な巨軀、魁偉なる風貌。

僧侶と言うよりはやくざの親分といったほうが似つかわしい玄道がはにかむ様は、いっそ可愛いともいえた。

あれからだ一言も発しようとはしない巨人は、ごつい唇に柔和な笑みを浮かべながら耳を傾けるのみである。

「俺んちは代々この寺の住職なんだが、ご先祖が大の武道好きでな。あっちこっちの流派を修めた挙げ句、とうとう、自分で一流を興し

ちまいやがった。

おかげで俺は坊主でありながら、明神流八代目ってえ訳だよ。困ったもんだ」

困った風もなく、玄道は笑った。

確かに、玄道の体躯は、坊主と言うよりは鍛え上げられた格闘家のそれであった。

188センチ、100キロ余の肉体に備わった熱量は一流プロレスラーをも遙かに上回る。

2メートルを越す巨人と並んでも遜色なかった。

―泉水寺の若先生はヒグマとやっても勝てる。

それがこの町の常識であった。

実際、玄道にはその経験があつたし、誰と戦っても勝てる、と言う自負もあつた。

昨夜亡くなつた七代目、玄蔵以外には、である。

玄蔵は、真の意味での“達人”であつた。

柔道で言うところの「剛能く柔を断ち、柔能く剛を制す。」を、まさに体現していた。

古来。

日本の武術界には「合気」と呼ばれる奥義がある。

いわゆる合気道には言うに及ばず、古流柔術、剣道、空手道に及ぶまで、名を変えてはいても存在するのだ。

古今の武道家、学者たちが理論的に体系化しようとしてきたが、玄道に言わせれば、それは無理な相談と言つものだった。

一口に「合気」と言うが、それを説明、体系化しようと思えば、力学に始まって、人体工学、生理学、果ては心理学まで引っぱり出してきてもまだ足りないであろう。

実際に見、技をかけられ、たゆまぬ稽古を気の遠くなるほど積み重ねて、初めて実感するものなのだ。

厳しい修行の果てに、自らが合気と化し、「合気の体」を具現して、初めて身につけたと言える。

玄道が知る限り、父、玄蔵に匹敵する合気の体現者は現存しない。日本武道史上、最高レベルの使い手であり、「最後の達人」とも讃えられた人だった。

野生動物並みのパワーとスピードを兼ね備え、恐るべき技の冴えを持つ玄道でさえ、玄蔵にかかつては子供扱いであった。

「もうちよいで勝てそうだったのによお。」

逝っちまいやがって、あのくそ親父……。

達人と云えども、病には勝てぬ。

享年63歳、日本武道界にとっては早すぎる死と言えた。

「まあ、俺の事はともかく、あんた、いったい何者だい。」

玄道は言葉を続けた。

巨人とはいえば、その太い唇に太い笑みを浮かべるのみである。

と、その時突然道場の明かりが消えた。

「!」

玄道は夜目が利く。

道場の広い窓からの月明かりだけで十分物の形を捉える事ができた。

巨人の瞳は闇に黄色く光っていた。

彼もまた、夜行獣並みの視力を持っているようだ。

千春は怯えて父親にしがみつく。

千春を抱いたまま用具入れをごそごそと探していた玄道は、やがて、大型の懐中電灯を持ってきた。

「電池は大丈夫だと思っん……」

玄道は異様な波動を感じた。

「その時、空間が歪んだ。」

「……!」

轟音が道場を揺らした。窓ガラスが砕け散る。

「本堂だ!」

瞬時に判断した玄道は、壁に掛かっていた日本刀をとり、千春を抱いたまま表に飛び出した。

「・・・」

一足先に出ていた巨人の指差す先には異様な影が月の光を浴びていた。

本堂は、半分がた消失し、それに続く玄道らの住居も半壊している。

無惨な様相の破壊の中心で、その影は月に向かって咆えていた。金属的なその叫びは天に向かい、可聴域を超えて響き渡る。

月明かりに浮かぶその姿は、まさに夢魔の妄想であった。

駿馬の下半身に繋がる、逞しくも雄々しき上体。

足踏みは稲妻を呼び。

雄叫びは雷鳴と化す。

両の複眼は地獄の炎の如く蒼く揺らめき、額の単眼は聖なるトリニテイを晦き真紅に印して燃え上がる。

逞しき腕は死神の鎌もかくやという鋭さを持って、半月の優美な円弧を模していた。

その姿は、まさに伝説のケンタウロスにも似て、人を神話の暗闇にと誘う夢魔よりの使者であった。

馬の体躯を持つ巨大なカマキリ。

進化という名の戦いの果てに、昆虫が持ち得た究極の姿であった。何万世代もの淘汰を重ね。

ただ、喰らい、生き延びるという目的だけに研ぎ澄まされたそれは、ナイフと同等の美しさを持っていた。

禍々しくも美しいその生物に、一瞬、玄道が魅せられたのは仕方がなかったのかもしれない。

その時、天が、笛の音を伴って裂けた。

10メートルの距離を一気に詰めたその鎌が、玄道の頭上を襲ったのだ。

左腕には千春を抱いている。

避けている暇はない。

「ちいっ！」

鞘に入ったままの右手の大刀で、鎌の外側に差した。瞬間、手首を返す。

相手が人間なら、それだけでバランスを崩すところだが、怪物は、攻撃を仕掛けてきた。

身体を右に回転させながら、左の鎌を叩き付けてきたのだ。

鎌は日本刀の鋭さを持っていた。

並みの武道家であれば千春とともに両断されていただろう。

しかし、玄道は並みではなかった。

押し込まれるのに逆らわず、それどころかその力に乗って跳んだ。

ゆうに5メートルは飛んでいた。

いくらその力を利用したにしろ、後ろ向きで、しかも千春を抱いたままでの跳躍である。

人間業とも思えない。

玄道もまた、野獣であった。

怪物との間が開いた隙に千春を素早く地に降ろし、玄道は刀を抜いた。

一瞬である。

その一瞬の間に事態は変わっていた。

巨人が、その目の前に歩み寄ったのだ。

あまりに無造作で自然な歩みだった。

怪物にとっては、巨人が突然現れた様に思えた事であろう。

ためらいは、だが、一瞬だった。

それは両の腕を交い込み、巨人を引き寄せようとした。

その強大な顎で引き裂くつもりであったのだろう。

巨人はまんまと引き寄せられるように見えた。

しかし、次に起こった出来事は玄道の眼を疑わせるものだった。

怪物の顔が弾け飛んだのだ。

巨人が渾身の力を込めてぶん殴ったのである。

事もあろうに、500キロを超えるであろう怪物の巨体がふっ飛び、地を揺らがせた。

とんでもないパワーだった。

それが起き上がるうとするのと、マオがその顔面を踏みつぶしたのがほとんど同時であった。

クルミの殻を割るような音がした。

平面的になってしまった頭以外は、意志あるもののようにのたうちまわっていたが、暫くすると静かになった。

玄道は戦慄していた。

人間同士の戦いにおいてさえ、殴られてふっ飛ぶなどという事は、よほどの体重差がない限りはあり得ない。

現実には、アメリカン・コミックの世界ではないのだ。

ましてや、いかに巨人が怪力であっても、三倍以上の重量を持つであろう怪物を、

文字どおり殴り飛ばすなどというのは物理法則さえ無視したような出来事であった。

にもかかわらず、それを実現する力が目の前にあった。

さしもの玄道でさえ、身の震えを止める事が出来そうになかった。

4

その街は相変わらず賑わっていた。

飲み屋帰りのサラリーマンの群れや、笑いさざめく女子高生、ストリートキッズを気取る若者たちが、逃げまどい、恐怖を、痛みを、悲しみを、苦しみを味わい尽くした果てに死んでいったその後も、その街は賑やかだった。

街路を闊歩する人間たちがその主役の座を野生に譲っても、街は喧噪に溢れていた。

生きたまま内臓を貪られつつある男の、狂ったような笑い声。

片腕を無くしながら逃げまどう女の悲鳴。

そこかしこの路地で聞こえる断末魔。

骨が噛み砕かれる音。

ボ口雑巾のようになった死体を取り合う獣の咆哮。

走り回る恐竜たち。

まだ戦うものがいるのか、時折響く怒声と銃声。

目に付く建物は縮爆で崩れ去り、道路は、あちらこちらに広がるクレーターの底に土の色をのぞかせ、車は攔座して、あるものは炎上し、あるものはそのまま棺と化していた。

人を誘うネオンの光も、街灯の明かりも消え去り、ただ、燃え上がる車の炎と満月だけが修羅場となった街を照らしていた。

その青白き光景と喧騒の中、無心に殺戮を繰り返していたものたちが一斉に動きを止めた。

目を持つものたちは目を、持たぬものたちは耳を、それさえ持たぬものたちは各々の感覚器を、街のある一点に振り向けた。

そこには、崩れ去った高層建築群の中、たったひとつ無傷のまま、奇跡の様に聳え立つ巨大なビルがあった。

自家発電の施設でも有していたのか、窓に明かりが灯っている。

そこには、原始の恐怖に身を竦ませる裸の猿たちが潜むのである。
う。

月の光に冴え冴えと、それは巨大な墓石のようでもあった。

―来る。

声にならぬ声が空間を震わせた。

蠢くものたちの畏れが地に満ちた。

その時、ビルの灯りが一斉に消えた。

と、ビルの中程、十階ほどが消失していた。

支えを失った上半分は、それでも一瞬の間、抵抗を見せるように
静止していた。

世界が動き始めた時、ビルの上階部分が下半分を押し潰すかに見

えた。

が、破壊はついに起こらなかった。

消失した部分の中心に向かって、上階の下面が崩れ去り、集中していく。

ビルの下半分も同様であった。

上面が、落下してくる一点に吸い上げられていくのだ。

奇妙で恐ろしい光景がそこに出現していた。

巨大なビルで作った砂時計。

神の悪戯としか思えぬグロテスクな造形物。

それはしかし、一瞬で姿を消していた。

巨大なビルは原子の一粒も残さずに地上から消え去っていたのである。

それが占めていた広大な空間とともに。

その虚無を埋める為に周りの空間が一点に殺到した。

空気も、塵も、死体も、生きている人間も、殺戮を繰り返すものたちも、燃え上がる車も、わずかな街路樹も、建造物さえも空間ごと歪んだ。

一点に集中した空間と物質はぶつかり、融け合い、太陽の如き業火を呼んだ。

揺り返した空間は凄まじい衝撃波と熱を伴いながら半径数キロにわたる徹底的な破壊を地にもたらした。

空間の断末魔は天にも轟いた。

上空の雲は一片も残さずにちぎれ飛び、一帯は、一木一草どころか、生物の影すら見えぬ、荒野と化してしまっていた。

ただ、この破壊をもたらした巨大なクレーターの中心に立つ、そのものをのぞいては……。

5

三人は、廃墟と化した街を歩いていた。

玄道は道着の上下に黒の短袴、両腕には鉄甲を嵌め、鎖帷子を着込み、腰には大小をぶち込んでいた。

右手に四尺杖、背には、斜めに父玄蔵の虎徹を背負い、腰には大きめのウエストバッグを着け、皮の小物入れを下げている。

そこまで見れば、まあ、武芸者の身なりなのだが、何を思ったか、足下はごついワークブーツで固めていた。

一見、まるで明治初期の壮士である。

それが、あどけない美少女である千春の手を引いているのだから、珍妙といえた。

玄道という男は、厳めしい強面でありながら、どこか人の笑顔を誘うところがあった。

憎めない漢である。

千春は、白のTシャツにGジャンとジーンズといういでたちであった。

お気に入りのスカートをはかせてもらえなかったのが気に入らぬと見えて、少し不機嫌である。

真面目な顔をして歩む姿が愛らしい。

巨人はと見れば、昨日と同じ、洗いざらした白い道着の上下だ。

少し窮屈そうなのは変わらない。

白帯を締め、大刀一本だけを差していた。

左手には六尺棒を持っている。

普通人が持てば、身の丈を超えるであろう棒が、せいぜい四尺杖ぐらいにしか見えなかった。

三人は、泉水寺の麓にある町まで降りて来た。

昨晩、カマキリの化け物と遭遇したあと、無言でうながす巨人に従ったのだ。

「ここにいつまでもいることはできない。ついてこい。

玄道独りならば、生き延びる自信はある。

しかし、愛娘の千春の身を案じれば、そうもいかないというのが本音であろう。

眼に入れても痛くない千春であった。

千春の為であれば、節も曲げる、理屈もへし折る玄道である。

巨人の底、を見たいという気も働いた。

昨晚見た怪力だけが、彼の本分ではなからう。

武道家としての本能が、あの怪力の裏にある、とんでもないものを察知していた。

「好奇心は猫を殺すというが……。」

玄道は苦笑していた。

しかし、玄道自身知ってか知らずか、この飽くなき好奇心が、彼を凡百の武道家とは一線を画する元であった。

彼は知るまで、身に付けるまで諦めない。

『他人に出来る事は俺にも出来る』というのが玄道の信念であった。出来るまでやる。

恵まれた体躯と類い稀な才能を持った天才が努力を惜しまないのである。

恐るべき好奇心であった。

偉大な父、玄蔵の境地に達するのもあと僅かであったらう。

その玄蔵を亡くした。

目標を失った玄道の落胆は余人には量れまい。

故に、新たに見付けた巨人という標的は、玄道を捉えて放さなかった。

悪女の深情けというが、武道家のそれほど始末に負えないものは無いだろう。

玄道の脳裏には、月夜をバックにふっ飛ぶ怪物の姿が鮮明に残っていた。

「あれがやれたら、かつこいいだろうなあ。

出来るまで諦めない玄道であった。

道が無くなっていた。

崩壊した建物の瓦礫、散乱する自動車の残骸、道幅いっぱい、道路がすり鉢状に穿たれているところさえあった。

奇妙な姿をした小動物や野犬の群が、三人の姿を認めると物陰に

逃げていく。

人の姿は無い。

死体すら見当たらなかった。

何とも知れぬ肉片が散見されるのみだ。

血痕であるう黒いシミがあちらこちらに印されているのが、昨夜の惨状を伝えた。

足下が定かでないクレーターを横切るのに、玄道は千春を抱いて歩いていた。

「けいさんがいる！」

唐突に千春が叫んだ。

「けいさんじゃねえ。慶次郎だ」

思わず言い返した玄道の感覚に、複数の殺気が伝わってきた。

20メートルほど先に十字路がある。その左の道路から闘争の気配が湧きあがったのである。

「慶次郎か！」

千春を抱えたまま、玄道は走り出していた。

前田慶次郎。

戦国末期、『カブキもの』として勇名を馳せた稀代の荒武者にして風流人。

などでは無論、ない。

玄道の愛弟子である。

前田慶次郎の大ファンだった父親が、前田という名字を幸いに、自分の息子に慶次郎と名付けたのだ。

玄道の友人の一人に『宮本武蔵』がいたが、親ばかはいつの世も変わらぬらしい。

玄道も人の事は言えない。

大好きな男性歌手の名を一人娘に付けたのは玄道なのだ。

千春には内緒にしてある。

男名前を付けられたと恨まれては堪らない。

慶次郎は、名前負けだといって『慶次郎』と呼ばれるのを嫌うが、

周りは面白がって、『慶次郎』と呼ぶ。

言い付けに従って『けいさん』というのは千春だけだ。

身長172センチ、65キロ。

慶次郎のサイズである。

武道家としては決して恵まれた体格とは言えない。

むしろ、小柄な部類に入るであろう。有り余る才能を持っているわけでもない。

しかし、武道家として、無くてはならないものを、たっぴりと身に備えていた。

好奇心と探究心、そして、努力する才能である。

ある意味、玄道のそれをも上回るかもしれない。

幼い頃から、父、玄蔵の弟子たちを数えきれないほど見てきた。

玄道自身、多くの弟子を持ってきた。

素晴らしい才能を備えたものもいた。

彼らは、技を吸収するのが驚くほど早かった。

コツを掴むのがうまく、足も高く上がった。

一方、不器用なものもいた。

突きひとつ、蹴りひとつを修得するのに時間がかかった。

コツコツと技をひとつひとつ積み上げてゆくのである。

半ばにして辞めて行く者も多かった。

だが、執念とも言える時を刻んで生きてきた才能少なきものが、最後には残っていた。

慶次郎はその一人である。

玄道、最大の収穫であった。

父を亡くし、泉水寺に引き取られたのは、慶次郎7歳の頃であった。

兄弟のいない玄道は、歳の離れた弟のように慶次郎を可愛がり、かつ、厳しく鍛えた。

やはり武道家であった父の手ほどきを幼い頃から受けていながら、パツとしない子供であったと思う。

天才肌であった玄道は、慶次郎が可愛いが故に齒がゆい思いもしたが、「この子は化けるよ」との、玄蔵の言葉を信じた。

その慶次郎が「化けた」のは、泉水寺に来てから、10年余り経った頃であった。

蛹が蝶になるように、堅い蕾が一晩で花開くように、その成長は爆発的であり、感動的でもあった。

それから5年。

たゆまぬ鍛錬の甲斐あって、慶次郎は、玄蔵、玄道に次ぐ腕を持つほどになったのである。

玄道をして、「素手じゃあ、やりたくねえ」と言わしめる慶次郎であった。

22歳になった慶次郎は、東京の大学に進学していて、来春卒業するはずだった。

その技量は言うに及ばず、知性、品性、人間性に至るまで、次代の明神流を次ぐに相応しい人物に成長していた。

男子を持てなかった玄道は、密かに千春の婿にしようと画策していた。

「歳は離れちゃいるが、10年もすりゃ千春は別嬪になるし、慶次郎は女にもてる柄じゃねえしな。

なに、彼女ができそうになったら邪魔してやらあ。

「まるでストーカーである。

しかし、父の企みには関係なく、なにより、千春がなついていた。「けいさん、けいさん。」と五月蠅いぐらいだった。

慶次郎も千春が可愛くて堪らないらしく、大学の休みには泉水寺に帰ってきて、千春と遊ぶのが趣味のようになっていた。

千春の婿にしようと思っっているくせに、そんな姿が面白くない玄道でもあった。

その慶次郎が戦っていた。

相手は二頭の獣である。

立ったときの目線は慶次郎ほど。

体重は軽そうだったが、その分素早いであろう。

大きな顎。

林立する牙。

鋭い爪を持つ前足。

のたうつ尻尾。

特筆すべきは、その逞しい後肢の、後ろ向きに植わった巨大なスパイクであった。それは、大振りなナイフの鋭さを持って、鈍色に輝いていた。

禍々しい姿を毒トカゲのような極彩色に染めて、それらは直立していた。

直立する大トカゲ。

恐竜であった。

慶次郎の足元にはすでに一頭のトカゲが倒れていた。

首が異様な角度に折れ曲がり、死の痙攣に捕われている。

仲間が倒されて警戒しているのか、残り二頭は慶次郎の周りを時計回りに回りながら威嚇の吼え声をあげている。

対する慶次郎は素手であった。

いくら慶次郎でも、素手では危ない。

玄道が加勢しようとした時、慶次郎が動いた。

左側の恐竜に近付いたかと思うと、左手を相手の鼻先に出した。

思わず噛み付きにきた恐竜の動きに合わせながら手を引く。

絶妙のタイミングで入り身を取りつつ、相手の左目に右の人差し指と中指を突っ込んでいる。

その二本を眼窩に引っ掛けて手前に引き落とした。

さしもの恐竜も、堪らずバランスを崩した。

恐竜が地に倒れた時には、その長い頸を踏み折っていた。

だが後ろにもう一頭の恐竜が近付いていた。

右足の蹴爪で蹴りにくる。

強烈であった。

当たれば腕の一本ぐらいは簡単に持っていられる。

しかし、慶次郎はその場にいなかった。

自ら恐竜目掛けて跳んでいたのである。

頭上から恐竜の頭に左手を突くと、回転し、そのままバックを取っていた。

乾いた音がした。

恐竜の顔が異様な角度で天を睨んでいる。

崩れ落ちた恐竜は、走る動作を繰り返したが、もう二度と立つ事はできなかつた。

二頭を倒すまでに5秒とかかかっていない。

「やっぱり、素手じゃお前とやりたくねえなあ。」

のんびりとした口調で声をかけた玄道へ振り向いた慶次郎は、満面の笑みを浮かべていた。

先程までの戦い振りが嘘のような爽やかな笑顔であった。

お世辞にもハンサムとは言えないが、浅黒く精悍な面構えと太陽のように明るい笑顔。

人を引き込む魅力を持つ青年である。

「けいさーん！」

玄道の腕から飛び出して、千春が一散に駆け寄る。

千春を抱き上げ頬擦りする慶次郎を見て、

「すっかり手なづけやがって。」

やっぱり、婿にするのは考えもんかなあ。

焼き餅である。

「心配しましたよ、先生。」

大先生の事を聞いて夜行に飛び乗れば、途中で脱線するは、夜っぴき走って来れば町はこの有り様でしょう？

千春ちゃんが心配で、心配で。」

「こら。俺の事は心配じゃなかったのか。」

「だって、殺しても死なないってのは分かってるんだし、心配しても損じゃないですか。」

「この野郎！」

千春を嫁にやるのは止めようと決心する玄道だった。

6

炎が人を和ませるのは、人類が初めて火を友とした時から変わらぬ事であるらしい。文明の火が途絶えた今、炎は、この小さなパーティーに束の間の安らぎを与えていた。

郊外の公園であった。

枯れ枝や、壊れた建物の木切れを集めてきて、玄道が火を熾したのだ。

火の周りには、木の枝に差した肉が焙られ、食欲をそそる香りを漂わしていた。

慶次郎が倒した恐竜の肉である。

以外にも美味であった。鶏に似て淡白な味わ이었다。

慶次郎が巨人に何事か話しかけている。

「・・・で、その女性が怖い、怖い。先生でさえ頭が上がらないんですよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

「先生は、女と子供には弱いんです」

もちろん会話になどなっていない。

玄道と言えば、ウェストバッグを枕に、地面に直接横になっていた。

愛刀を左手に握ったままだ。

千春はその玄道の腹の上に俯せになって眠り込んでいる。擦りむいた鼻の絆創膏が笑みを誘う。

巨人に話しをしていた慶次郎の右手が、消えた。

眼にも止まらぬ速度で、巨人の後方の闇に落ちていた石を投げたらしい。

石は闇に吸い込まれて消えた。地に落ちる音さえしない。

慶次郎が放った礫である。

小口径の拳銃弾並みの威力はあった。

その礫を、払いもせずを受け止めた相手もまた並ではない。

「無沙汰の詫びにしてはご挨拶じゃのう、慶次郎。」

飄々とした声が闇から届いた。

「そうよ、慶次郎。どうせなら刃物にしてあげたら良かったのに。」
艶やかな声が響く。

闇から現れたのは、小柄だが頑丈そうな老人と、妖艶そのものの美女であった。

老人は、好々爺然とした風貌の下に、岩の量感を持つ肉体を有していた。

白髪を後ろで束ね、仙人の風格を持ちながら、白いTシャツにジーンズ、綿のサマージャケットが妙に似合う老人であった。

手に、慶次郎の投じた石を玩んでいる。

老人の名は平田平助といった。

ふざけた名だが、玄道の父、玄蔵の兄弟子に当たる人で、「平田流平法」の創始者である。

玄道でさえ、一目置いている程の達人だった。

美女は、美しいという形容しかできないほどの美女であった。

腰まで伸びた碧なす黒髪。

猫を思わせ輝く切れ長の眸。

整った鼻筋と、完璧なラインを描く唇。

肌はあくまで白く透き通り、大理石の如く艶やかであった。

ジーンズに白いサマーセーターという簡素な服装が、彼女のスタイルの素晴らしさをいっそう引き立てていた。

ただ、彼女は美しすぎた。

氷の冷たさを、見る者に感じさせたのである。

その美女が口を開いた。ビロードを思わせる深いアルトが響き渡る。

美女は、声まで美しかった。

「若先生。

なんで私たちを呼ばなかったの。」

― 出た。

慶次郎は彼女に見えぬところで肩をすくめた。

美女、神河内由美子は、玄道の幼馴染であり、かつ、兄妹弟子であつた。

日頃は「先生」と玄道を呼ぶ。

だが、「若先生」と由美子が口にする時は剣呑であつた。

表面上は穏やかでも、怒りに燃えている時に、そう呼ぶのだ。あと、「お兄ちゃん」「玄道君」の順で危険度が増していく。

美女の怒りは恐ろしい。

それを知る慶次郎も、平助も余所を向いて知らんぷりを決め込んでいた。

巨人は成り行きを楽しんでいるのか、その鷹の眼に笑みを浮かべている。

「電話も携帯も通じなかつたんだぜ。町もあの有り様だしな。

おめえらに万がひとつもネエだろうし。」

まあ、無事遇えたんだからいいじゃねえか。」

不精たらしく横になつたままで玄道がほざいた。

― 火に油！

慶次郎は頭を抱えた。

「おにいちゃん！」

由美子は一瞬で夜叉と化した。

切れ長の双眸は稲妻を含み、美しい黒髪は伝説のメデューサの如くのたうつかに見えた。

帯電した空間が雷鳴を轟かすのも瞬余の事であろうと思えた。

思わず姿勢を正した玄道の動きに目覚めた千春が、由美子の姿を認めたのはその瞬間であつた。

「由美ねえちゃん！」

千春が由美子に駆け寄る。

「千春ちゃん！無事だつたのね！」

千春を抱き上げた由美子には夜叉の憤怒は既になかつた。

あるのは慈しみに満ちた菩薩の相だけであつた。

先程までの怒りが、嘘のように消え失せていた。

由美子は千春を愛していた。

幼くして母親を亡くした千春を、実の子の如く愛してきた由美子であつた。

今まで独身を通し、子を持たぬ由美子が、その母性愛の全てを注いできたのが千春である。

オムツも替えた。

泣き止まぬ千春に、出ぬ乳を含ませた事もあつた。

妻を亡くし、おろおろするばかりの玄道の替わりに、千春を育てたも同然の由美子であつた。可愛くないわけが無い。

氷の美貌が、千春に対する時は暖かい母の顔に変わった。

「何時もそんな顔してりゃ、可愛いのによ……」

内心、胸を撫で下ろしながら玄道が呟く。

「若先生。後でお話がありますからね。」

由美子の言葉に首をすくめる玄道であつた。

「地上最強の称号は由美子さんに贈るべきだなあ……」

慶次郎は、夜空を埋め尽くす星々を眺めながらそう思つたのだつた。

7

「昨日灯りが見えたのは、多分、あの建物ですよ」

それは、上階部分をきれいに失つたマンションであつた。

7階から上は切り取つたように消えていた。

他の建築物に比べれば、損傷が少ない。

「慶次郎、付いて来な」

「はい」

玄道と慶次郎で、中を探る事にした。

玄道は杖を持ち、慶次郎は、来る途中にあつた武道具屋から拝借してきた釵を両手に握っている。

狭い廊下などでは刀はかえって扱い難い。それ故の選択である。

明神流での武器術は、元々、刀、槍、棒、杖から、手裏剣、隠し武器に至るまで多岐にわたる。

それに加えて、玄蔵、玄道二代の努力が実を結び、琉球古武術、北派、南派の中国武術などの武器術の研究から始まり、果ては銃器の扱いまでをもその手の内とするに至っていた。

明神流は単なる格闘技ではない。

時代とともに生きる武芸であり、兵法なのであった。

「……………」

マンションの中は荒廃していた。

荒れ具合は、表と大差無い。

鋼鉄製のドアがひん曲がり、部屋の中は台風が走り去った後の惨状を呈していた。

獣たちに襲われたのであろう。

壁や床に黒いペンキをぶちまけたような半分乾いた血痕が、部屋の佇まいをシユール・レアリスムの絵画と化していた。

ところどころに印された手の跡が、画面を引き締めている。

大量に流されたであろう血の匂いが建物全体に染み付いている。

「酷いですね。」

慶次郎が呻いた。

ひとつひとつ部屋を確かめていく。

どの部屋も似たようなものであった。

それまでと異なるものを見つけたのは、4階から5階に上がる階段にさしかかった時だった。そこはバリケードで塞がれていた。

人の手によるものであろう。

一筋の希望を胸に、ふたりはタンスや椅子、冷蔵庫等で出来た障害物を降ろし、道を作った。

5階は無人であった。

獣たちの刻印を刻んでいない廊下を、探りながら進んでいく。

しかし、どここの部屋にも、人の気配はない。静かであった。

一番奥の部屋に入った。

他の部屋と変わらず、鍵は掛かっていなかった。

瀟洒な部屋であった。

若いカツプルの愛の巣だったに違いない。

若妻の好みであろう花柄のカーテンが広い窓には引かれ、品の良いアンティークな家具が、部屋の持ち主の趣味の良さを伺わせる。

赤ん坊がいるのであろう、キッチンの水切りには、哺乳瓶があった。

「慶次郎、こっちに来な。」

ベッド・ルームに通じるドアを開けた玄道が、慶次郎を呼んだ。

玄道の頬は白く強張っていた。

その視線を追った慶次郎の眼もまた、こわい光を湛えた。

ドアの右手にはベッドが二つ、ベビーベッドを挟んでいる。

天井からは が吊られ、ガラガラが床に落ちていた。

壁には、幼子を腕に抱き優しく微笑みかける、妻の肖像画があった。

ベッドに静かに横たわる女性をモデルとしているのは、一見して明瞭であった。

夫は日曜画家だったのであろう。

素人の域を脱せぬ拙い筆ではあったが、そこには、愛する者を描く喜びが満ち溢れていた。夫は、美しい妻と子をこよなく愛していたのだ。

そして、手前のベッドには、その母子像が再現されていた。

だが、それは夫の描いた妻と子の、奇怪なパロディでしかなかった。

醜悪なユーモアで仕立てられたその作品は、血膿に浸る欲望と、凶暴な自我によって彩られ、見る者に吐き気と怒りしかもたらさない。

ベッドに横たわる若妻の美しい眸は恐怖に見開かれ、その喉は、片方の耳からもう片方の耳まで、深紅の唇をこう笑の形に刻まれていた。

平らかな腹は血にまみれ、その内容物を床にぶちまけている。愛する我が子を育てていた豊かな左胸は赤い洞と化していた。その頂が切り取られていたのである。

赤ん坊は優しい腕に抱かれ、眠っているかに見えた。

額に穿たれた黒い穴を除いては。

銃弾が抜けたのであろう。

後頭部が血膿の洞窟と化していた。

母親の失った乳首が幼子の口に突っ込まれているのを認めた玄道は、噛み締めた歯の間から、錆色のうめきを絞り出した。

その響きは、慶次郎がこれまで聞いた事も無いほどの怒りに彩られていた。

「やったのは人間だぜ・・・」

ナイフで刻まれ、拳銃で撃たれてる。

この子が苦しまなかつただろう事だけがせめてもの救いだな・・・

「

楽しんでやってますよ、これは。

犯した後、時間をかけて髑ってる。

しかも、殺しといてこんなポーズをとらしたんだ・・・」

慶次郎の声もまた、怒りに嘔れていた。

「くそ野郎、こんなこたあ、人間のやる事じゃねえ！

多分、昨日の夜、やりやがったんだ。まだこの建物にいるかもしれねえ。

見つけ次第・・・

殺すぞ、慶次郎！」

「はい」

玄道は突き進んでいった。

怒りで空間を歪めながら。

階段を上がりきった玄道たちの見たものは、眼を疑うような光景だった。

この町に来るまでに、ケモノたちの食事の跡を数知れず見てきた二人だったが、ここの乱雑さに比べればきれいなものだった。ケモノたちは食らうために殺す。

人間は殺しに楽しみを見いだす。

6階から上はおもちゃ箱を引っくり返したようになっていた。

ヒトがヒトの身体を玩具にすると、こうなるのだ。

額を撃ち抜かれて廊下の壁に寄りかかって座る男。

犯され、切り刻まれて、血の池に横たわる少女。

裸に剥かれてシャンデリアに吊られた男の性器は睾丸ごと抉り取られている。

縛られ、顔を焼かれた老人。

股の間に金属バットを生やし、壁に打ち付けられた女性。

首の無い少年の足の間には、彼の首であるう、自身の性器をくわえ涙を浮かべていた。

まるまると太った健康そうな赤ん坊の首から上は、踏み付けられたのか、ぐずぐずの肉塊になっていた。

まるで、人体破壊の見本市であった。

人々は、犯され、吊るされ、焼かれ、切り刻まれ、踏みつぶされ、息絶えていた。

死んでからさえも、思い付く限りの辱めをその肉体に刻まれて。

ケモノたちの襲撃を逃れて集まっていた人々を、狂気の群れが襲ったに違いない。理性の箍が外れた人間は、そのキチガイ猿たる本性を現して、弱く、怯えた同胞に向かって牙を立てたのだ。

「・・・・・・・・」

一番奥の部屋から、耳障りな笑い声が届いた。

顔を見合わせた玄道と慶次郎は、音も立てずに走った。

開いたドアから調子のはずれた嬌声と粘着質の声が聞こえてくる。

「・・・・・・・・もつと腰振れ、腰をよー」

「・・・最後の獲物なんだからすぐ殺すなよ、ヨー。
楽しまなきゃ、損じゃん？」

「きやははは・・・」

部屋の気配を探った玄道が慶次郎に右手を開いてみせた。

5人。慶次郎はうなずく。

部屋のどこに相手がいるかも、二人は感じ取っていた。

真ん中に、女性を組み敷いた男が一人。

それを挟むようにして二人。

ドアの横、床に一人が座り込み、最後の一人は一番奥に陣取っていた。

敵は銃器を持っている。

反撃の猶予を与えてはならない。一気に叩き潰す必要があった。

玄道の合図で、二人は飛び込んでいた。

まず、ドアの脇にいた敵に、玄道の杖が唸りをあげた。

脳漿を飛び散らせてくずおれたのは、年端もいかぬ少女であった。
交番でも襲撃して奪ったものか、拳銃を握りしめていた。

慶次郎が、陵辱を見物していた二人を倒していた。

若い男たちであった。

右の男は血に塗れた日本刀を、左の男は大振りのサバイバルナイフを下げていた。

何が起こったかも分からなかったであろう。

右の男は頭蓋を叩き潰され、左の男は額に穴を開けられていた。

二人は、血を撒き散らしながら仰向けに倒れていった。

奥のソファに座った少年だけが反撃の意志を見せた。

右手に持った猟銃を玄道に向けたのだ。

しかし、凶器はその当初の目的を果たさぬままに床に転がった。

慶次郎の投げた釵が、少年の右手を襲ったのだ。

玄道は跳んでいた。

飛びながら、女性を陵辱していた男の頭を蹴った玄道は、次の瞬間、ソファの男の前に立っていた。

彼には、玄道がいきなり現れたように思えただろう。あわてて、ソファーの上のナイフを取ろうとした。

その時、少年の世界は終わりを告げた。

玄道のサザエのような拳と壁に挟まれた少年の頭は、落とした卵よりも脆くその中身をぶちまけていたのだ。

「大丈夫ですか？」

床に倒れていた女性を、慶次郎が抱き起こしていた。

愛くるしい顔立ちをした少女であった。

10代であろう。高校生ぐらいに見える。

肉体の損失は無いようだが、裸身に残る無数の打撲の跡や切り傷が痛々しかった。

よほどショックが大きかったに違いない。

何も見てはいないかのようなその眼はガラス玉を思わせた。

「うっ……」

ただ一人生き残った男がうめいた。

少女を犯していた男だ。

やはりまだ少年の顔立ちをしていた。

後頭部を蹴られたせいで、ボーツとしている。

何が起こったのか分からないらしい。

数瞬後、少年は床に転がる仲間の死体を見、玄道と慶次郎の姿を

認めて、がたがたと震えた。

立ち上がるうとするが、できない。

股間のは縮み上がっていた。

少年はニキビ面を歪めて情けない声を上げ始めた。

「……お前ら、何なんだよう。」

ヨースケたちを殺しちまったのかよう、この人殺し……」

「お前に人殺しとんざ、呼ばれたくもねえッ！」

この外道が。

人殺しだけじゃ飽き足らず、死体にいたずらまでしゃあがって！
一瞬で死ねるだけ有り難いと思いやがれ。」

凄まじい胸間声が建物を揺るがせた。

憤怒の仁王像と化した玄道が雷光を背負っていた。

気の弱い者なら、その眼にひと睨みされただけで頓死するであろう。

少年が大量に漏らした小便が、カーペットに広がっていった。

「やめてくれよう。」

死にたくねえよう・・・助けてくれよう。

俺はそいつらに付き合っつて、やっただけなんだ・・・

俺はやりたくないっつて言っただのに・・・」

少年は小便のシミを広げながら後じさる。

くどくどと言いつつ始めた。

甘やかす母親の事、気の弱い父親の事、自分を悪の道に誘い込んだ友人の事・・・。

悪いのは自分ではない。

悪いのは母親であり、父親であり、学校、教師、友人であり、世間であった。

自分は悪くない、むしろ被害者なんだ・・・

この少年のパーソナリティには反省、後悔などは存在しなかった。少年にとって、他者への愛など戯言に過ぎない。

愛情とは全て自分に向けられるものであり、他人は少年に奉仕するべきなのだ。

ひとの痛みには無情でも、自分への迫害には耐えられなかった。

少年の自我からはゴミ溜めの臭いがした。

眼を背けたくなるほどの醜さであった。

「そ、そうだった！」

そのおんなやるからさあ、たすけてくれよお。

そいつの具合すごくいいんだ・・・」

さっきまで犯していた少女に眼を止めた少年は、素晴らしい交換条件を思い付き、口にした。

慶次郎の眼が、蒼く底光りした。

「・・・彼女は、君の所有物じゃないよ。」

先生、こいつ、ひと思いに殺すんじゃない、死んだ人たちに悪いんじゃないですか？

苦しんで死んでもらいませんか？」

「お前にしちや、いい事言っじゃねえか、慶次郎。
うん。」

ゆっくりと死んでもらおう。」

玄道たちが、罪なき人々をマンションごと火葬に附して去った後、四肢の関節を外され、路上で芋虫のようにのたうつ少年は、忍び寄るケモノたちの息づかいを感じていた・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1646c/>

天に叫びしは誰ぞ

2011年1月26日13時14分発行